
涼宮ハルヒの羨望

中毒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒの羨望

【Nコード】

N9719H

【作者名】

中毒

【あらすじ】

産まれてはじめて書いたのでおかしいですww。そこんところよろしくお願いします。あと更新は週一にしようと思ってます。

プロローグ（前書き）

冬。今まで散々迷惑かけてくれた忌ま忌ま忌ま忌ま忌ましい早朝強制ハイキングコースが唯一活躍できる季節。登校中に体温が上昇し、少し感謝してしまうな。だが、他の3つの季節の苦勞を考えると3対1で存在意義が完敗、やはり活躍しても迷惑なことには変わりない。などと思っていた冬の日の話である。

プロローグ

いつものように、全員集合して文芸部室に入り浸り、SOS団専属メイド兼俺の目の保養の朝比奈さんからお茶を頂いて喉と目と心を癒していた。

最近はこれと言った事件もなく、団長様の行動力も蛙とともに冬眠したようで至って平和だった。

俺はと言うと部屋の片隅にある積みゲーを処分すべく、学校に携帯ゲーム機を持参している
負けフラグ立てまくりの中ボス进行处理していた時

「おや？ 貴方はRPGが好きなのですか？」

向かいに座る古泉が話かけて来た。

画面が見えないのに何故わかるんだ？ 超能力か？

「いえ、そのゲームは僕も持っているのでBGMでわかりました。それにしても意外ですね、貴方がRPGをするとは…」

集中力が切れたせいか、操作ミスをして主人公が倒れ、ゲームオーバーの文字が画面に写る。古泉のせいだ。俺の実力じゃない。

「現実世界でファンタジーまがいことを体験している貴方ならする必要がないかと思いますが」

「ゲームは別だ。それに剣と魔法のファンタジーは体験したことないからな」

俺はゲームを古泉の方に滑らせ、集中力を削いだ償いに倒すように促す。

こいつの腕前はどれほどのものだろうな。ま、クリアしてくれるなら知ったこっちゃないが。

「体験してみたいとお思いですか？」

それは意外ですね。貴方は平凡な日常を求めている方だと思っていたのですが…」

「そんな訳ないだろ。」

高校生活にファンタジーを求めたことなんかない」

高校生まではそんなこと思っていたかもしれないこともあったかもしれないが、黙っておくことにしよう。

「そうですか………はい、終わりました」

再びおれの手元に帰ってきたゲームは中ボスがフラグを回収している最中だ。

はあ、やっと進めるな…。

実は昨夜から苦戦し続けていたことは黙っておくか。と、ゲームに集中しようとした時だ、やつが現れた。

ブログ2（前書き）

書き溜めました。毎週日曜日に更新します。

プロローグ2

「やっほー、今日も寒いわね。
地球に恋人ができたら春が来るかしら？」

知らん。仮にできるとしたら緑豊かな星じゃないとな。移住するた
めに。

「待ってるだけじゃ新天地なんて現れはしないわ
自分で作るか、探すかしないと
人に頼るなんて以っての外！」

と言いながら自分の席につく団長。

「ならこの部室はどうなる？」

文芸部である長門に頼って手に入れた場所じゃないのか？」

「有希はSOS団の団員だからいいの」

はて、部室を奪ってから強制入団させていた気がするが……まあ言
っても無駄だから黙っておくか。

すると唯我独尊団長様は俺の手にあるものに気がついたようで、

「団長が寒い寒い教室で掃除に励んでいた時にアンタはゲームして
た訳！？」

俺だけじゃなくて古泉もしてたんだが…

「古泉君を盾にすれば逃げれるとも思ったの？」

馬鹿ね、キョン。古泉君がこんな幼稚なものをする訳ないじゃない」

と、言っただけだ。

幼稚だってよ、と古泉に目で訴えると首を傾げやがった。

この野郎、自分だけ助かるつもりか。

「で、ゲームをしてたらどうな r：『没収』

言い終わる前に奪われた。

「このゲームはアタシが責任を持って管理します」

理不尽だ。返せ。

「ダメ！」

反省してるから返さ：

「ダメったらダメ！！」

「わかった、そんなにやりたいなら貸してやるから、俺がクリアするまで待て」

「べ、べつにやりたいわけじゃないんだから…」

と、言いながらも視線が手元に向いているぞ。

まあそこまでやりたいなら貸してやるか……

結果から言えば、ここでの俺の判断は間違ってた。
わざわざ自分で爆弾に火を付けてしまったんだもん…。古泉に怒られても仕方ない。

そう、これが全てのはじまりだったのだ。

1-1 (前書き)

昔書いたやつだから文がひど過ぎて修正が大変ww
ww

1-1

なんの変哲もない日常だった。
このまま大人しく冬を越させてほしかったのだが、やはり神様は許してくれなかったようだ。

その次の日の朝…

……眩し……ん？なんだ？朝か？
まあ妹が起こしに来ないならまだセーフな時間なんだろう。もう少し寝てるか…。

毎日起こしてもらえると、起こしてもらうまで寝てようって駄目な
考えになってしまうからいかな…。
起こす側は1／3ぐらい起こしに来なかったら起こされる側にも良
い薬になるんじゃないか？
だが、そんなことされたら俺の出席率が1／3減ることは確実。こ
のアイデアは駄目だな。
と、考えていると…

「起きなさい！キョーン！」

とドアを開けて団長こと涼宮ハルヒが入ってきた。
そうだ、ハルヒを目覚ましにすればいい。
ハルヒに起こされるぐらいなら俺は自らの意思で起きるかもしれん

な、何をされるかわかったもんじゃないし……………ん？、ハルヒ？

いやいや聞き間違えだろ。

そんな漫画みたいに女の子が起こしに来て、一緒に学校に行くなんてあるはずない。

とりあえず声の主を確認するために、寝ぼけ眼を擦りながら体を起こしてみた……………が、やはり制服姿のハルヒだった。

「早く起きて外を見てみなさいよ、すごいわよ！」

今の台詞で、なんでこいつがうちに来たのかわかった気がした。

大量の雪にはしゃいで、雪球投げる的を確保するために俺のところに来たに違いない。

試しに窓の外を試してみる。

「……………嘘だろ」

俺は自らの頬を強く抓った。

そりゃ抓りたくもなるさ。

俺の目の前に広がってた世界は一面の銀世界ではなかった。

目の前に広がる壮大な大自然も

山の上を飛んでいる鳥とも竜とも取れる生き物も

街の店の軒並みも

そしてその中にそびえ立つ不気味な城も

俺がハルヒに貸したゲームのまんまだったのだ

この時はじめて自分がした行為の愚かさを知った。
そうだ、ハルヒにファンタジーを与えてはいけないんだった。変に
憧れでもしたらSOS団がファンタジーの世界まで飛ばされること
になる…。

俺は軽く自己嫌悪に陥った。

ごめんなさい、朝比奈さん、やってしまいました。でも泣かないで
くださいね？

貴方に泣かれたら、自己嫌悪の頂点を極めてしまい、きっと俺はロ
ープを探し回るでしょうから。

「現実よ、嘘でも夢でもないわ。

なんならアタシの伝説の右ストレートをお見舞いするわよ？」

そんなもんいらん。

是非自分にお見舞いしろ。そのファンタジーに染まった頭を修正す
るためにな。

それに、現実だってことはわかってるさ。お前が横にいることがそ
の裏付けだな。

お前がいなかったらまだぶっ飛んだ俺の頭が見せた馬鹿な夢で済ま
せれるんだがな。

「SOS団面子はどこだ？」

俺の貸したゲームは、最終的には魔王を倒して終わるゲームだ。
つまり、ハルヒも少しはやったならその目的もわかっている。

故に、今から魔王を倒しに行くわよ、と言うはずだ。

おそらく俺より先に進んでいるであろう古泉にラスボスの倒し方、たどり着き方を聞かなくては…。

だが古泉達が飛ばされているかどうか問題だし、違う場所に飛ばされている可能性もあるが…

「下に皆いるわよ。それより皆に発表したいことがあるの、早く降りましょ」

スキップしながら上機嫌で部屋を出ていくハルヒ。

どうやら杞憂に終わったようだな。

軽くため息をつきながら、後に続いて俺も部屋を後にする。

周りを見渡してやっと気づいたが、ここは俺の家じゃない。

剥き出しの木材で作られたこの家は、昔の西洋を連想させるような棚、ベッド、イス、机があり。

全てが古くさい。それに何故か俺の服装が制服になっている。

ふと足を見れば、俺は靴を履いていた。この辺も西洋っぽいな。

「んで、皆の中でお前が率先して起こしに来たのか？」

お陰で最悪な目覚めだ。

朝比奈さんが来たならこんな世界だとしても、テンション的にはプラマイゼロ、いや、プラスに傾いていたのに…

「じゃんけんして負けたから起こしに来たのよ。べ、べつに率先して起こしに来たわけじゃないんだからね」

と、やり取りしている間に下に着いた。

6人掛けの長方形のテーブルに着いた皆がこちらに顔を向ける。
朝比奈さんと古泉が続けて声をかけてきた

「おはようございます」

「おはようございます、良い目覚めでしたか？」

おはようございます。

目覚めは最悪だ。

と各人に返事をして俺も席につく。

1-2

「さて、皆揃ったわね。

ここはどうやらキヨンがやってたゲームの世界らしいわ。

私も昨日少しやったからわかるの。

そこで提案があるんだけど…」

俺はわかるぞ。お前がなにを言うか。一字一句手に取るようにわかる。そんな焦らさなくても、ここにいる全員はわかってるはずだ。こう言うんだろ？

「魔王を倒しに行きましょう」

…だろ？

やっぱりそうだったか…。俺の行きたい気持ちなんてミジンコほどもないのに、この世界から抜け出すためには行かなくてはならないのか？……………はあ。

「あら？よくわかったわね？」

「お前の言いそうなことならたいいはわかるさ」

「なら、次に言うこともわかるわね？」

そんなもん知らんし、わかりたくもないな。

例えわかっても言わないだろうな。それでハルヒが調子に乗ったら困るのは俺だからな。

「あれか？魔王城にある宝の分け前か？」

適当に答えてみた。

とらぬタヌキの皮算用だ。魔王を倒せるかわからんし、魔王が宝を持っているかも定かではない。

案の定、ハルヒの表情は曇り

「馬鹿キョン、違うわよ。魔王を倒した後のお礼の分け前よ」

余計悪くなってるかい？

そんな下心持った勇者は見たことないぞ。それとも俺が知らないだけで、行間で魔王に負けて散った愚かなやつらがいるのか？

「下心があっても結果を出せばそれでいいの。世の中、善も悪もないんだから」

無駄にカッコイイこと言ったが、それは、『ご褒美が欲しいから魔王を倒します、ご褒美がないならなにもしません』っていうのを肯定しているだけなのではないだろうか。

まあ言っても無駄だろうから言わないが…

「と、言う訳で、情報収集といきましょう」

ハルヒは5本爪楊枝を取り出した。

いつものように2本だけ先端が赤く塗られている。

どうやら2班にわかれるらしい。ここでハルヒと同じになったら状況が聞けないからそれだけは避けねばならない。

皆無言で取っていき、俺の番がやってきた。

この時点で長門は無印、朝比奈さんも無印、古泉が赤。俺とハルヒ

が同じ班になることはない。

「さあ、よく選りなさいよ」

しかし俺は心の底から無印を望んで引いた。

どちらを選んでも状況を聞くことはできるが、どうせなら朝比奈さん、長門に聞いたほうが聞く気も出てくるし、心に良い。

さあどっちがでるか…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9719h/>

涼宮ハルヒの羨望

2010年10月10日00時51分発行